

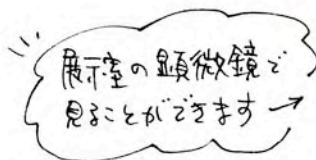
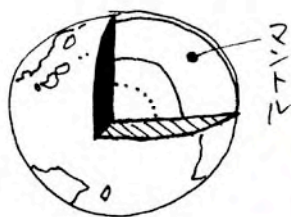
Estuary 042

エスチュアリ

～いしかり砂丘の風資料館だより～

☆エスチュアリ…「河口」の意味。北海道一の大河、石狩川と日本海とが出会う場所、それが石狩です。

世界でただひとつ、緑色の砂浜があります。ハワイ島、グリーンサンドビーチ。長さ100mくらいの小さなビーチですが、その名のとおり、一面の砂は緑色。砂粒のほとんどが「かんらん石」という緑色（オリーブグリーン）の鉱物でできているからです。かんらん石は、地球の体積の8割を占めるマントルの主要な構成鉱物です。地下2900km（地球の中心まであと半分近く、という深さ）に起源をもつマグマが噴き出す火山島ハワイだからこそ見られる、世界でここだけの浜辺です。現地に行くには、レンタカーで保険の効かない荒れた道が途切れるまで走り、さらに先は自らの足で1時間歩いて、やっと辿り着きます。

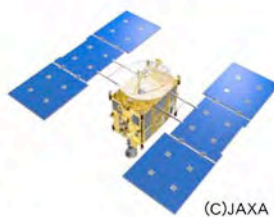


■かんらん石

(グリーンサンドビーチの砂)

化学組成 (Mg, Fe)₂SiO₄

採集地 ハワイ島マハナ湾



(C)JAXA

ははぶさかイトカワから持ち帰ったのも、これ↓と同じかんらん石。



60億kmの行程を経て、数々のピンチを乗り越えて小惑星イトカワから帰還した日本の探査機、はやぶさ。そのサンプル回収容器からは、イトカワから採取された微粒子が1500個も入っていることがわかりました。その中にたくさん含まれているのも、かんらん石です。かんらん石は、地球型惑星の内部や小惑星にはありふれた鉱物なのです。ただし、地球で見られるものとイトカワのものとは、同じかんらん石でも成分比（鉄とマグネシウムの割合）がかけ離れています。だからこそ、微粒子が地球で混入したものではなくイトカワのものだと判断されたのです。

グリーンサンドビーチとイトカワ。スケールは全然違いますが、困難な旅の末にようやく辿り着いた、かんらん石の粒でした。◆

(志賀健司 しがけんじ)

↑砂粒の大きさは1mmくらい。からぞ見せられなくて残念！資料館のwebで見てください。

★☆☆持ってないけど 持っている☆☆★

新しい年を迎えました。皆さんは、何か今年の目標をたてましたか？

年女の私は干支のウサギに合わせて、何事にもフットワーク軽く挑んでいきたいという目標をたててみました。

さて、資料館ではテーマ展「資料館のお宝2011/めざめよ！剥製たち」が始まります。これは、常設展示では紹介できない資料（普段は収蔵室で出番を今か今かと持っているもの）、学芸員が採集した資料、この一年間に戴いた新規寄贈品などを織り交ぜて展示を行うものです。人から人、手から手、そして資料館へ渡される寄贈品との出会いは貴重で、次の世代へ残していく資料館のお宝となっていくと思いますが、今回は残念ながら新規寄贈品の展示はありません。その出会える回数が年々少なくなって

きているような気がします。寄贈品はくださる方のご厚意によるものなので、こちら側からとしては何ともし難いことですが、資料館に対する関心が薄くなってきているなら、ちょっと心配です。

砂丘の風資料館は、使えるスペースの関係もあり、たまにお客様から「展示物が少なく物足りない」という声を頂戴します。他の施設に比べたら展示物の種類・数は持っていないのでしょう。それでも、興味がそそられるものがあったり、自分のニーズに合わせた活用ができたり、行けば何か見つかるような“持っている”資料館へと、皆さんと共に作り上げていけたらと思っています。

今年も、どうぞよろしく願いいたします。 ◆

(倉 雅子 くらまさこ)

沖縄と北海道を繋ぐ「貝の道」

毎年、沖縄県恩納村の子供達が交流のために石狩市を訪れており、今年も2月に恩納村の子供達が石狩市へやって来ます。今でこそ沖縄と北海道は飛行機で行き来できますが、飛行機のない縄文時代（本州の弥生時代～古墳時代に相当）から沖縄と北海道が交易ルートで繋がっていたことをご存知でしょうか。

沖縄ではサンゴ礁に生息する貝を用いて、縄文時代から貝製品を作っていました。弥生時代に入ると主に九州に住んでいたリーダーたちの間で、沖縄産の貝で作られた貝輪（貝製の腕輪/写真1）などで着飾り、自らの力を誇示することがブームになります。佐賀県の吉野ヶ里遺跡からも貝輪が多数出土しており、当時の様子が伺えます。

貝輪ブームは九州だけに止まらず、中国・四国地方や関西などへも広がり、最終的には北海道へ到達しました。これらの交易ルートは「貝の道」と呼ばれています。この貝の道を通じて北海道へもたらされた貝製品が、伊達市の有珠モシリ遺跡（縄文時代）の墓から出土しているのです（写真2）。もちろん、沖縄の人と北海道の人が直接交易を行った訳ではありませんが、弥生時代から沖縄と北海道とが貝の道という交易ルートで繋がっていたらしいことが分かります。 ◆

(千田寛之 ちだひろゆき)

参考文献

沖縄県教育委員会（2001）貝の道－先史琉球列島の貝交易－



写真1 イモガイ製貝輪



写真2 有珠モシリ遺跡出土の貝輪

※画像は沖縄県教育委員会（2001）より

琥珀・陶磁器ざんまい

昨年（平成22年）は石狩浜歩きで実に充実した日々を過ごさせてもらいました。その一つは琥珀です。こんなに琥珀が多い年もないという人もいますが、足を運ぶ回数にも比例するのではないかと思います。それと目が慣れてきたことや、漂着する条件などが次第に体得されつつあることにもよるのでしょう。上流で雨が降り数日後、海が荒れて風が来て、木屑や草、石炭が打ち上がると期待がもてます。しかし今年はライバルたちが多数、出現。

とくに土日は早朝でも拾えないことの方が多し。もっとも余り早いと琥珀の色が見えないからこれもまた駄目で、願わくは晴天で逆光がベストと思われ。12月に入っても、今日は駄目だろうと思いつつ出かけても、必ずといって良いほど琥珀に巡り会えます。

また、広報いしかり1月号にも書きましたが、今年江戸時代の陶磁器片が目についた年でもありました。これまでも陶磁器は採取していなかった訳ではありませんが、今年かなりの量



越後産焼酎徳利の完全品
(豊富河口出土 全高25センチ)

まとまって採取できました。場所は石狩川河口の左岸とそこから少し海水浴場よりの石狩浜です。砂金の採取ではないけれども、寄せ場——つまり特定の場所に繰返し漂着するようです。今のところ「越後産焼酎徳利」（写真）と呼ばれる徳利の破片が主なものです。これは三平皿（なます皿）、コンブラ瓶とセットで幕末期の蝦夷地3点セットと呼ばれるものです。陶磁器の破片が採取される浜背後の砂嘴の形成年代は、ここにある石狩灯台が明治25（1892）年完成ですから陶磁器の年代より新しい。ですから、これらの陶磁器は幕末期繁華だった石狩本町、八幡町から流れ出した可能性が高いとみています。これまで3点セットのうち2点は拾っていますが、コンブラ瓶は未採集です。今年是非、これを拾ってみたいと思っています。

なおコンブラ瓶というのは、主に幕末から明治初期に長崎県波佐見（はさみ）で生産された醤油または酒瓶のことで、肩のあたりにオランダ語？で「JAPANSCHZAKY」（日本、酒）「JAPANSCHZOYA」（日本、醤油）と書かれている白い瓶のことです。◆

（石橋孝夫 いしばしたかお）

海の歴史 第三のアシカ



石狩の海には、冬になるとアザラシ科やアシカ科の海獣がやってきます。石狩浜ではアシカの仲間としてトド、オットセイの2種が、生きている姿はまず見られませんが、死体の漂着がときどき確認されます。しかし今から数十年前に戻ることができたら、もしかしたら「第三のアシカ」が見られたかも知れません。それは「ニホンアシカ」です。トドやオットセイにちよつと似ていますが、サイズは両者の中間くらい（平均体長：オス2.4m、メス1.8m）です。



トドの漂着（2006年、新川河口）

トド、オットセイは国内では主に冬、北日本〜東日本沿岸で見られませんが、ニホンアシカは千島列島から九州まで、太平洋、日本海を問わず、通年で生息していました。特に伊豆諸島や島根県の竹島などは繁殖地として知られていました。北海道では、奥尻島や礼文島などでは先史時代の遺跡からもニホンアシカの骨が出土しています。

江戸時代には日本周辺で数万頭が生息していたとされるニホンアシカですが、明治に入ると皮や脂、肉のために乱獲され、生息数が激減。1974年礼文島、1975年竹島を最後に、捕獲・目撃例は途絶えています。ただし最後の目撃から50年以上経過していないことから、環境省レッドリストでは「絶滅」ではなく「絶滅危惧」とされています。もしかしたら石狩の海にひょっこり現れる可能性も、ゼロではないかも？

◆（志賀健司 しがけんじ）

1月～3月の講座・展示

野外講座

石狩ビーチコーマーズ／冬の漂着物

冬の浜辺の漂着物を観察・採集し、その正体や起源をみんなで考えます。冬の北西季節風は、様々なものを石狩浜に吹き寄せます。“大物”が見られるのもこの季節！

- 日時 2月20日(日) 09:00～13:00
- 場所 砂丘の風資料館～石狩浜
- 対象 小学4年生～大人
(小学生は保護者同伴で)
- 定員 20人(先着順)
- 持ち物 防寒着、長靴、手袋、ビニール袋など
- 費用 無料
- 申込 2/2(水)～2/18(金)の間に電話で資料館(0133-62-3711)へ



テーマ展

資料館のお宝2011

めざめよ！剥製たち

キタキツネ、オットセイからエトピリカまで、普段は資料館の収蔵庫で静かに保管されている、いろいろな動物の剥製を公開！

- 日時 1月22日(土)～3月27日(日)
- 場所 いしかり砂丘の風資料館

※資料館の入館料(大人300円、中学生以下無料)が必要です。



↑イルカの骨の標本化作業
アオイガイのサイズの計測→



WANTED!!!

資料館でボランティアをしよう！
博物館が好きで、楽しみながらお手伝いをしていただける人、連絡待っています！

- 不要なもの：知識・経験
- 必要なもの：好奇心・やる気

お手伝いの内容は、たとえば…

- ・標本処理(骨ボラ、近日始動！)
- ・資料計測(貝のサイズ計測など)
- ・野外調査(いろいろな定期観測)
- ・展示づくり

■石狩市広報に連載「いしかり博物誌」

- ☞第110回：石狩鍋とキャベツ(2010年11月号)
- ☞第111回：浜辺の考古学、歴史学(2011年1月号)

***** 編集後記 *****

2010年秋は、石狩にアオイガイ(カイダコの殻)が大量漂着！過去に多かった2005～2007年を軽く上回る数です。これまでマジメに海岸を歩いてきたおかげで、海洋環境との関連も少し見えてきました。何年、何十年と調査・記録を続けて見えてくるもの—それぞれ博物館の大きな役割のひとつ。気は焦りますが、千里の道も一歩から。十歩くらいは進んだかな？(け)

いしかり砂丘の風資料館

- 開館時間 午前9時30分～午後5時00分
- 休館日 毎週火曜日(祝日の場合はその翌日)、年末年始
- 入館料 300円(中学生以下は無料)、
団体料金240円(15名以上)
- 交通 中央バス札幌ターミナルより石狩行き乗車、
「石狩温泉」下車、徒歩1分
(石狩温泉「ホテル番屋の湯」向かい)

エスチユアリ No.42

2011年1月20日発行

いしかり砂丘の風資料館
〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4
TEL/FAX: 0133-62-3711
bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp
http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/museum/